



中国における"独生子女"問題と"素質教育"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2008-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋迫, 和幸, 李, 紅海, Li, Hongmei メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/1504

中国における“独生子女”問題と“素質教育”

橋迫 和幸・李 紅梅*

Research on Problems of China's One Child and Quality Education

Kazuyuki HASHISAKO, Hongmei LI

1 研究の目的と方法

近年、中国では、おもに都市部を中心に急速に進展する少子化が大きな問題となっている。1979年から本格的に「独生子女」政策（一人っ子政策）が実施されて以来、今日までの約20年間に、この政策によって3億人近くの人口増加が抑制されたと推定されている。中国人口情報研究センターの報告によると、1995年には中国の3.2億世帯のうち20.7%が一人っ子家庭（「独生子女家庭」）で、独生子女の総数は約6600万人であった⁽¹⁾。20.7%という数値は中国全体の平均値であり、大都市に限ってみれば一人っ子家庭の比率はもっと高いと推測される。今日ではその比率はさらに増え、上海、北京、広州などの大都市では、一人っ子家庭が過半数を占めていると予測される。

中国でこのように少子化が進んでいるもっとも主要な要因は、言うまでもなく、中国政府が1979年以来、「独生子女」政策、すなわち一組の夫婦は子どもを一人しか産まないようにという人口抑制政策を実施していることである。しかしそれだけでなく、最近では人々の結婚に関する意識の変化を背景に核家族化が進行して家族の規模が小さくなっていることや、都市化の進行などによって仕事と子育ての両立の負担感が増大していること、教育費など子育てそのものの負担感が増大していること、なども少子化の要因として挙げられる。

出生率の低下によって少子化が進行している日本では、少子化が教育にも影響を及ぼす問題としてとらえられ、中央教育審議会（中教審）は2000年4月に「少子化と教育について」と題する報告を発表した⁽²⁾。そのなかで少子化が教育に及ぼす影響として、①子どもどうしの切磋琢磨の機会が減少すること、②親の子どもに対する過保護・過干渉を招きやすくなること、③子育てについての経験や知恵の伝承・共有が困難になること、④学校や地域において一定規模の集団を前提とした教育活動や行事が成立しにくくなること、⑤良い意味での競争心が希薄になること——が指摘されている⁽³⁾。

本来、子どもはきょうだいや仲間と関わりながら、遊んだりケンカをしたりする経験をとおして、人間的な成長を遂げ、個性を伸ばしていくものである。少子化によって子どもどう

* 中国瀋陽師範大学外国語学院講師

しが切磋琢磨する機会が減少することは、子どもの成長・発達にとって好ましくない結果をもたらす恐れがある。たとえば、家庭ではきょうだいげんかをする機会もなく、テレビゲームやパソコンなどの機械を相手にした一人遊びばかりをして過ごす結果、他者との関わり方を身につけることが困難になる。そのため、学校が上がっても、クラスメートとの関係や教師との関係がうまくいかない子どもも少なくない。様々な人間関係が順調でなければストレスが溜まり、それを発散させようとして好ましくない行動に走ることにもなる。日本でいじめや不登校が深刻な問題となっているのは、こうした状況とも無関係ではないだろう。中国では、いじめや不登校はまだ社会問題として取り上げられるほどではないが、その兆しはすでに現れており、少子化問題の進行ともかかわって、これから真剣に考慮しなければならない問題である。

中国における「独生子女」政策は、開始後すでに20年が経っている。それだけでなく、それは国民の生活レベルを向上させるために人口増加を抑制するという国の基本政策でもあるから、今すぐ中止するというわけにはいかない。しかし近年、独生子女をめぐる様々な問題が現われていることも事実であり、今後も「独生子女」政策を進めていくためには、これらの問題の解決が図られなければならない。そのためには、道徳的素質、科学文化的素質、身体的素質、心理的素質等々、子どもの素質（中国では、「素質」というのは生まれつきの生得的な性質ではなく、後天的に獲得される性質を指す言葉として用いられている）をバランスよく育成する「素質教育」を発展させることが重要だと考えられている。しかし、子どもたちにこれらの素質を育てるためにはどのような教育活動が有効なのかについては、ようやく研究が着手されたばかりで、解明すべき課題が多く残されている。一体、中国における独生子女（一人っ子）の増大が引き起こしている問題の本質は何か、その問題の解決に資することが期待されている素質教育を進めるためにはどのような取り組みを行うことが求められているのか——こうした問題について明らかにすることが、本稿のねらいである。

1979年に「独生子女」政策が開始されて以来、独生子女問題は研究者たちの注目を集め、これまでもいくつかの研究成果が発表されている。それらの研究成果をレビューした李学斌（リ・シェピン）氏の1998年の論文「近年我が国における独生子女に関する研究および分析⁴⁾」によると、1980年代の10年間に発表された独生子女に関する論文や研究報告書の主なものは、そのほとんどが教育学や心理学の視点から行われた研究であった。それに対して1990年代には、なお依然として教育学、心理学分野の研究が主流である傾向は変わらないものの、同時に、社会学や人口学の視点から行われた研究成果の比率が増加するという新しい傾向も現われているという。これは独生子女問題が教育学・心理学の問題としてだけでなく、社会各分野の注目を集めるようになってきたことを示唆するものといえよう。

李氏によればさらに、1990年代における独生子女に関する研究には1980年代とちがって、研究の深さや広さ、研究の視野や領域などの点でも、新しい傾向が現れてきているという。たとえば心理的特徴の上で独生子女と非独生子女の間には差異があるのか、あるとしたらどんな差異があるのかを明らかにする研究や、独生子女家庭の特徴に関する研究、「独生子女」政策と計画出産との関係に関する研究などが、そうした新しい傾向を示すものとして挙げられている。しかし李氏は、これらの研究にはいくつかの問題点があると指摘している。たとえば研究領域の面では、独生子女の知性や道徳、個性などを取り上げた研究が多い反面で、独生子女の身体的素質に関する研究が少ない。また、研究対象として小・中学生が取り上げ

られることが多いのに対して、学齡前の児童に関する研究が少ない。さらに、独生子女と非独生子女との比較研究に偏りすぎて、独生子女どうしの中の差異や独生子女家庭の中の差異が十分検討されていない、などの問題である⁽⁶⁾。

孫云暁（ソン・ウンショウ）氏は1998年に『独生子女の健全な人格を育成する⁽⁶⁾』という著作を公刊し、そのなかで中国都市部における独生子女の人格発達の現状とその要因について分析するとともに、それにもとづいて様々な教育対策案を提言している。

孫氏によれば、独生子女も非独生子女も同じような教育を受けているにもかかわらず、独生子女に特有の特徴がみられるのは、独生子女がおかれている環境条件が非独生子女の場合と異なっているからであるという。たとえば独生子女は非独生子女より過保護・過干渉という成育環境におかれやすい。その結果、子どもの自立を促す様々な体験が乏しくなり、身体が弱くなったり栄養過剰になったりしてしまう。さらに、集団生活に適應できず、孤独感が強くなるという問題も見られる。

孫氏はさらに、人格特性の異なる独生子女の成育環境の比較をとおして、成育環境のなかのどのような要素が子どもの人格発達に肯定的な影響を与え、どのような要素が否定的な影響を及ぼしているのかを分析している。その結果、家庭での親の養育方針や子どもに対する親の態度、学校における教師の態度、子どもの学習負担や独生子女の仲間関係などが、独生子女の人格発達に影響を及ぼす重要な要素であることが明らかにされたという⁽⁷⁾。

こうした結果にもとづいて孫氏は、家庭では親が子どもを理解すること、子どもの権利を尊重すること、子どもを信じること、子どもを特別扱いしないこと⁽⁸⁾、また学校については、子どもに成功体験をさせること、点数で競争させないこと、子どもに自信をもたせること、集団活動を重視すること⁽⁹⁾、などの具体的な提案を行っている。

このように孫氏の研究は独生子女をめぐる問題を明らかにするだけでなく、問題解決のための具体策を提言している点で注目される。しかしその提案はなお一般的な提案にすぎず、独生子女をめぐる現われている問題を根本的に解決するのに十分効果的な対策とはいえない。

さらに李艶（リ・エン）氏は1999年に、『子どもに相互学習させよう——独生子女教育に関する成功の道⁽¹⁰⁾』という著作を公刊した。このなかで李氏は、中国の著名な社会学者、費孝通（フェイ・ショウトン）の“子どもどうしの影響は教師や親の影響より大きい”という社会学理論にもとづき、また自身の研究成果をもとに、「子どもに相互学習させよう」という提言を行っている。李氏の考えでは、独生子女問題のほとんどは、“独生”、つまり一人っ子李氏はであることによって生じているので、李氏は独生独生子女がおかれている環境によって引き起こされた問題なのである。そこで李氏は独生子女の環境を改善することを重視し、子どもどうしの相互学習の重要性を強調するのである。

独生子女問題に関する研究としては、ほかに、康麗穎（コウ・レイエイ）氏が発表した『独生子女——希望と挑戦』（中国教育報、1998年）、『世紀の焦点——独生子女と素質教育』（現代家庭報、1998年）があ戸解く制すな毒性のる。これらの著作はいずれも、独生子女の人格発達の現状とその要因について分析し、それをふまえて様々な教育的対策を提案したものである。

以上のように、孫氏をはじめ、独生子女に関するこれまでの研究では様々な対策案が提出されているが、しかしいずれも一般的・理論的で抽象的なレベルにとどまっているといわざ

るをえない。本稿では、これまでの研究を参考にしながらも、一般的・理論的なものだけではなく、もっと具体的な方策に焦点を当てることにする。具体的には、子どもの素質を全面的に高めるのに最も有効であると考えられる体験教育に重点を置く。そのなかでも、中国独特とも言える軍隊での体験活動やサマー・キャンプの活動に注目し、それらが独生子女問題の解決を図るための素質教育にとってどのような点で有効性をもちうるかについて検討することとする。

2 中国における少子化問題とその背景

中国における少子化はどのような社会的背景のもとで進展し、それが引き起こした問題はどのようにとらえられているのであろうか。

中国における少子化の直接のきっかけは、言うまでもなく、政府によって「独生子女（一人っ子）」政策が進められたことである。すなわち、中国政府は1979年に、それまでの人口増加政策を大きく転換させ、「独生子女」政策を本格的に実施し始めた。

中華人民共和国では、建国初期、人口は重要な財産であるという毛沢東主席の人口資本論にもとづいて人口増加政策が採用された。しかし、この施策によって中国人口は政府の予想を上回る勢いで増大した。加えて、1958年に開始された“大躍進”運動⁽¹⁾の失敗と相次ぐ自然災害によって食糧不足が深刻化し、やがて人口抑制へと転換が図られていく。

1970年代になると計画出産が奨励され、1973年には国務院に「計画出産指導組織」が設けられて、「晩婚、晩産、一組の夫婦に子ども二人まで」という方針が打ち出され、これがやがて「独生子女」政策として新たな展開を見るに至った。「独生子女」政策の一つの契機となったのは、当時の中国社会科学院院長の次のような指摘である。すなわち院長は、「1977年の国民一人当たりの平均食糧は55年の水準にしか相当しない。要するに、人口増加の故に、20年間の食糧生産は人口の伸びにしか達していなかった⁽²⁾」と述べ、中国社会の現代化を進めていくための基盤づくりとして人口抑制が必要であることを説いた。こうした人口過剰状況に迫られて、中国政府はやむなく「独生子女（一人っ子）」政策を徹底的に実行することを決意したのである。

この政策によって、子どもを1人しか持たない夫婦は表彰し、3人以上の子どもを持つ夫婦には経済的な制裁を加えるという賞罰制度が導入され、出産の自由が規制された。こうした具体策を含む「独生子女（一人っ子）」政策は確かにめざましい成果を収め、人口の急激な増加にブレーキがかけられることになった。それ以来、今日までの20余年間に3億人近くの人口増加が抑制された。そしてその分の資源が中国経済の発展に注がれ、国民の生活水準がある程度高められるとともに、中国国民の労働力としての質もある程度改善されたと考えられている。

もとより、何事にせよものごとには良い面と悪い面があるが、「独生子女」政策も例外ではない。すなわち、「独生子女」政策はこれまで人口抑制という点では大きな成果を上げてきた一方で、それが引き起こした問題も少なくない。急速な少子化高齢化の進展は、そのなかでもとくに重大な問題の一つである。

すでに触れたように、日本の中教審報告「少子化と教育について」では、少子化が教育に及ぼす問題点として5つの問題が指摘されている。では、中国では少子化の進展によってど

のような弊害が現れていると考えられているのであろうか。

中国ではまだ具体的な調査データはないが、「独生子女」政策によって一家族あたりの子ども数が減少した結果、その一人の子どもを大切に育てようとする傾向が強まったことから、中国でも日本と同様、親の子どもに対する過保護・過干渉の傾向が生じていると予想される。それどころか、中国の一人っ子家庭における親の過保護の度合いは、日本以上かもしれない。なぜなら、中国には日本では見られない「四二一」式と呼ばれる独特の現象があるからである。「四二一」式というのは、両親のほか、親の親たち、つまり父方の祖父母と母方の祖父母4人を加えた合計6人でひとりの子ども（孫）の面倒をみることを指す。要するに6人の大人の目が一斉にひとりの子どもに向けられるわけである。こうした親・祖父母6人がかりの過保護・過干渉によって、「ご飯が出されたら食べ、洗濯ものが出されたら着替える」というような、自分では何もしない「小皇帝」（“小太陽”という言い方もする）になる子どもたちが少なくない。

1996年から1997年にかけて、中国青少年研究中心少年児童研究所が中国都市部における独生子女の人格発達の現状に関する調査、「独生子女発達調査」を行っている。それによると、親や祖父母の過保護のせいで、中国の独生子女は家事を手伝わないものが大多数であること、また家事を手伝う場合でもその時間はごく限られていることが明らかにされた。同調査ではさらに、子どもの家庭学習のスケジュールを決める親、子どもの日記をチェックする親が少なくないなどの実態が明らかにされている⁽¹³⁾。

日本の中教審報告「少子化と教育について」では、少子化が教育に及ぼす問題点の一つとして「競争心の希薄化」が挙げられている。子供同じく中教審報告が指摘する問題点の一つ、「切磋琢磨の減少」と相まって、子どもたちの活力を低下させる恐れがある。この点は中国でも例外ではなく、少子化に伴う重大な問題の一つとして深刻に受け止めなければならない。ただし競争心の希薄化が問題となるのは、子どもたちが互いに刺激しあい切磋琢磨しあう機会が少なくなるという意味においてであって、決して敵対的な競争が教育を活性化すると考えるからではない。たしかに中国でもこのような意味での競争を重視する考えがある。たとえば孫云暁（ソン・ウンショウ）は、資源と機会が限られている社会的条件のもとでは、個人によって生存状態の優劣には差異があり、それゆえ人々が有利な生存状態を目指して競争するのは必然的なことであって、善し悪しを論じうる問題ではないと述べている⁽¹⁴⁾。しかし、他人を押し退けて自己の利益を図ることを目的とする競争は、子どもに否定的な影響をもたらしてしまうだろう。少子化がもたらす競争心の希薄化は、子どもたちから活力を奪うという点で確かに問題であるが、同時に競争そのものについては慎重にとらえることが必要である。

1979年から「独生子女」政策が実施されて以来すでに20以上経った今日、「独生子女」の第一世代はすでに青年期を経て成人に達している。独生子女青年のなかには、ただでさえ困難な思春期葛藤に加え、一人っ子ゆえの問題を抱えて発達上の困難を一層深刻化させている若者たちもおり、青年期における独生子女の問題に対する対策が早急に求められている。

南京大学法学院の張仁善（ジャン・インサン）は、「現代青少年犯罪の現象、要因および防止対策について」という論文で、中国では近年、青少年の犯罪率が上昇していると指摘している⁽¹⁵⁾。公安機関の統計によれば、1994年には未成年（18歳未満の子ども）の犯罪率は犯罪件数全体の18%を占めており、実人数は1979年に比べて6倍以上に増えているという。

さらに1980年代後半以後、少年犯罪の低年齢化も進んでおり、とくに一人っ子の多い上海ではその傾向が強いという。さらに、中学校や高等学校における少年たちの組織的暴力が勢いを増しつつあることも、今日の中国における青年をめぐる深刻な問題の一つである。

このような少年犯罪の深刻化には、急速な経済発展を背景として経済的利益を優先し精神的価値を軽視する風潮が今日の中国社会に現れていることが大きく影響している。しかしそれだけでなく、ただでさえ不安定な思春期の困難に、さらに独生子女が抱えているさまざまな問題が重なり合って、問題を一層深刻にしていると考えられる。こうした点でも、思春期・青年期にある独生子女の教育課題に早急に取り組むことが求められているのである。

3 素質教育と体験教育

(1) 素質教育の理念と背景

「素質」という言葉は、日本では生まれつきの性質を意味する言葉として用いられるのが普通であるが、中国ではやや異なった意味で使われている。中国でも、心理学では素質は「人間の生来的生理解剖の特徴にもとづく生得的な性質を意味する⁽¹⁶⁾」ものにとらえられているが、教育学では次のようにとらえられている。すなわち、「教育学の視点からみると、素質とは道徳的素質、知識的科学的素質および生理的心理的素質の全体、すなわち社会主義“四有(理想あり、道徳あり、知識あり、規律あり)”を備えた新人の精神構造——それはまた社会主義新人の品格でもある——を指す⁽¹⁷⁾」と。このように、心理学の立場では素質は生得的な性質としてとらえられているのに対して、教育学の立場では、素質はおもに後天的な性質を示す概念として用いられる傾向がある。

素質を後天的に獲得される性質としてとらえ、これを意図的に育成することに教育の新たな発展の可能性を見出そうとする考えは、とくに最近における中国政府の教育政策動向に強く現れている。

中国の学校では、10年間におよぶ“文化大革命”(1966年～1976年)が終わった後の1980年代初めには、教師が知識を一方向的に教え込む「填鴨式(テンヤシイ)」教育が一般的であった。1980年代なかごろには、経済の急速な発展を背景として「填鴨式」教育はますます優勢となり、上級学校への進学に照準をあわせた、教科中心、点数重視、少数精鋭の「受験体制」(中国では「応試教育」という言う)が盛んになった。しかし同時に、急速な経済発展がもたらした社会の激変によって子どもたちをめぐる新たな問題状況が現れ、「填鴨式」教育ではそうした問題を解決できないばかりか、かえって問題を深刻化させることが批判されるようになった。さらに1990年代になると、独生子女問題をはじめ様々な子どもの教育問題が噴出し、基礎知識、実践力、思考力、創造力などの育成によって問題の解決を図ることが新たな教育の課題として認識されるようになった。

こうした状況のもとで、中国政府もそれまでの教育政策の転換を余儀なくされた。1993年、中国共産党中央委員会と国務院が連名で「中国教育改革と発展綱要」を公布し、基礎教育は素質教育であるべきことを明示した。1998年には政府の教育部が「二十一世紀に向けての教育振興計画」という文書を公布し、素質教育の重要性を強調した。さらに1999年には中央政府が「教育改革を深化し、素質教育を全面的に推進する決定」という政策文書を公布し、素質教育を全面的に推進するという方針を本格的に打ち出した。同じ時期、北京で改革開放以

来の第3次全国教育工作会議が開かれ、その会議で、「教育改革を深化し、素質教育を全面的に推進することに関する中共中央、国務院の決定」が公布された。そこでは、受験教育ばかりを重視してきた学校教育や親たちの偏った教育観を早急に改め、素質教育を全面的に展開しなければ、中国の未来は危うくなると指摘されている。その後も国務院の全国基礎教育工作会議などの重要な会議が開かれ、「国家基礎教育課程教育改革綱要」（2000年）、「普通高校“研究性学習”実施指南」（2001年）、「国務院基礎教育改革と発展に関する決定」（2001年）などの文書が相次いで公布され、素質教育の重要性が繰り返し表明されている⁽¹⁸⁾。

このように、今日の中国で「素質教育」と呼ばれているのは、これまでのような受験中心の教育体制を転換し、知育・徳育・体育・美育のバランスの取れた教育によってすべての子どもたちの全面的な素質の発達を目指すものである。しかし、それは決して画一的な教育でもなければ一部エリートのための教育でもない。素質教育とは、「因材施教」（適材適所）の教育理念にもとづいて優秀な才能をもった子どもたちのための教育をも重要な一環として位置づけつつ、すべての子どもたちに個性に応じた豊かな能力の育成を目指すものである。

(2) 素質教育の具体的方法としての体験教育

若い世代の人間の成長にとって体験活動が重要であるとの認識は、恐らくいつの時代のどのような社会においても共通に見られたことであつたらう。中国でも、厳しい体験は若い世代の成長にとってとりわけ有意義なものとして重んじられてきたが、最近になって、素質教育の観点から体験教育の重要性があらためて注目されている。

その一つのきっかけとなったのは、1992年8月に内モンゴルのウランチャブモン草原で中日の子ども（中国児童30名と日本児童77名）によって行われた「夏令营」（夏休みを利用して行うキャンプ。以下、「夏令营」と表記する）である。この夏令营で、中国の子どもは意欲や忍耐力、粘り強さなど様々な面で日本の子どもより弱いことが分かった。とくに日本人の子どもから発せられた「あなたたちは私たちの相手になれない」という一言が、中国各界に警鐘を鳴らした。次の世代の教育に関する根本的な改革を早急に行わなければ、中国は21世紀の厳しい国際競争に勝ち残れないかもしれないと危惧され、社会各層で現代中国の学校教育と家庭教育の欠陥について激しい論議が展開された。

今日では家庭教育、学校教育、社会教育の各領域にわたり、また教育制度や教育内容・方法だけでなく教育思想にも欠陥や誤りがあることを、多くの人々が感じ始めている。他方で学校の教師たちは、これまで経験したことのない問題を抱えた膨大な独生子女群を前にして、どう教育をしたらよいか手をこまぬいている。このような状況のなかで、国家教育委員会基礎教育部は次のように指摘している。「今日の小中学生のうちの多数が独生子女である。彼らには、時代によって与えられた長所があると同時に、目に見える弱点も現われている。たとえば内モンゴルでの夏令营のさいに分かったように、中国の一部の子どもたちは、労働の苦しさに耐えようとする粘り強さや、失敗しても何回も繰り返して最後までやとげようとする意志、困難を克服しようとする勇気などが足りない。彼らは21世紀の社会主義建設を担う主役であり、彼らの資質や品格の如何が、中華民族の未来と運命を決めるのだ。だから、独生子女に関する教育問題は、全社会、とくに教育者と親によって真剣に受け止められなければならない⁽¹⁹⁾」。

現在、都市部の家庭はほとんどが一人っ子家庭で、子どもの過保護が問題となっている。

独生子女はその家庭の“小太陽”になって、大人たちはみんな彼らを中心に回っている。このように独生子女は“いつも自分を中心に”という環境のなかで育てられ、何でもひとからしてもらって、自分ですることがなく、様々な体験活動の機会も奪われている。これでは、子どもにわがまま、自己中心、怠惰、依存心という悪い慣習を身につけさせてしまうのではないかと危惧されている。

たとえば、中国青少年研究センター、中国少年新聞社および中国社会科学院新聞研究所が共同で中国の中規模以上の都市の小学校3年生～中学校3年生の子どもを対象に道徳的発達状況の調査を行っている。1991年に発表された調査結果によれば、中国の子ども・青年の道徳的発達状況は、全体的には良好である反面で、怠惰、臆病、自己中心などの問題が比較的目立っていることが指摘されている。1994年には、遼寧省小学生心理補導課題組が同省の小学生を対象に“心理的素質の測定と診断”を行っているが、その結果によると、小学生の心理的素質は全般に低いことが明らかにされたという。また、天津、上海および杭州で行われた調査では、小中学生の自立性と社会的適応力が低いことが明らかにされている。さらに1992年に上海で小中学生を対象に行われた調査では、いつも親に生活用品や学習用具を片づけてもらっている子ども、生活や勉強の面で親の世話がないとどうしたらいいか分からなくなる子どもが多数にのぼることが明らかにされている⁽²⁰⁾。このような一連の調査から、今日の中国の子どもたちをめぐって、親に過保護・溺愛されて何でも自分から積極的にしようという意欲が乏しい、良い労働習慣を身につけていず、労働に参加したいという意欲も技能も乏しい、総じて何事にもやる気が弱いなど、人格発達上の重大な問題が浮かび上がっている。

こうした状況が生み出された要因はさまざまであろうが、多くの教育学者たちはここに現代中国における教育の危機を感じ、とくに子どもたちの体験活動がきわめて乏しいことが素質の伸長を妨げ、人格の発達を歪めている最も重大な要因であると指摘している。そして、このような子どもの問題状況を解決するために体験教育を重視する必要性を訴えている。

4 体験教育の意義と課題

以上にみてきたように、中国では社会の大きな変化、とくに独生子女の増大とそれに伴う新しい問題の生起を背景に、素質教育の重要性が指摘され、その具体的な方法として体験教育が注目されている。しかし、これらの動向はごく最近現れたものであり、独生子女問題の解決に資する素質教育の進展を図るためにはどのような体験教育が有効なのかなどをめぐって、まだ解明されていない問題が多く残されている。ここでは、こうしたなかでも、夏令营(サマーキャンプ)と、軍隊における体験教育を取り上げて、考察することにする。

(1) 夏令营(サマーキャンプ)

素質教育の重要な方法の一つと考えられている体験教育では、とくに社会生活や生産活動に参加して実践活動を行うことが有意義なことと考えられている。中国では、たとえば夏休みを利用して、“一日農民”とか“一日従業員”、“一日兵士”などの活動に取り組んでいる学校が少なくない⁽²¹⁾。これらは文字どおり1日だけの活動ではなく、1週間ぐらいにわたって行われる活動である。子どもたちは、農民と一緒に様々な野良仕事の体験をしながら、労働の大変さ、食べ物のありがたさを感じ取る。あるいは工場で従業員と一緒に働きながら、自

分で作った製品ができたときの喜びと労働の満足感を感じる経験をするのである。

今日でもなお盲目的に受験勉強を重視している親たちもいるが、子どもたちをめぐる問題が明らかになるにつれて、独生子女の素質教育の重要性に目を向けるようになった親たちも少なからず現れている。そうした親たちのなかには、長期にわたる夏休みや冬休みの間、子どもを放任したり一人でテレビゲームをさせてばかりいると、子どもの健やかな成長に否定的な影響を与えてしまう恐れがあることによく気づき、夏休みや冬休みの間に体験活動をさせる親たちもいる。近年、独生子女の自主性を高め視野を広める目的で行われる修学旅行（中国では「教育旅行」と言う）が盛んになっている背景には、こうした親たちの支持がある。修学旅行のなかでもとくに「夏令营」（夏休みを利用して行うキャンプ。冬休みに行うキャンプは「冬令営」と言う）は、子どもの自主性や忍耐力などの素質を高めるのに大きな意義をもっていると考えられている。

このような夏令营は多彩な形で展開されており、たとえば、「私はできる夏令营」、「環境保護夏令营」、「海外交流夏令营」、「森の大変さを味わう夏令营」、「探険夏令营」、「大学見学夏令营」などが行われている。これらの夏令营の具体的な活動内容は、夏令营のタイプによってさまざまであるが、一般的には軍隊体験や自然体験、社会的実践体験などからなり、子どもどうしが互いに助けあう体験をととして素質の全面的な発達が促されるようにすることを目的としている。

夏令营の効果については、例えば「江南都市報」2002年7月10日付の記事が次のように報じている⁽²²⁾。すなわち、湖南省の省府、南昌市で、江西省蚕桑研究所などで行われた夏令营では、子どもたちははじめて親元から離れて共同生活を営み、地元の人々の指導のもとでお茶をつんだり草で編み物をしたり大豆で豆腐を作ったりなどの体験をした。わずか3日間という短い期間ではあったが、子どもたちは自然と社会を教室にした“緑色学校”で生き生きとした有意義な夏休みを過ごすことができたこと、この記事は報じている。

夏令营などの体験活動に参加する子どもたちはまだほんの一握りであり、またこのような活動が子どもたちの素質教育にどのような効果をもたらすのかについては、まだほとんど明らかにされていない。しかし、親元を離れ、自分のことは自分でしなければならない生活を体験することは、独生子女に見られる発達上の歪みを解決するだけでなく、今や独生子女が多数を占めつつある中国の若い世代の人間の諸能力を高めるのに有効であると予想される。もちろん、もともと子どもたちの素質は、夏令营などの特別な機会においてではなく、家庭や地域における日常生活や学校における学習をととして自ずから育成されてきたものである。しかし、独生子女が急速に増大し、しかもそれは国の人口抑制策として避けられないものである以上、従来の自然な形での素質教育に代わる何らかの手だてが採られなければならないことは明らかである。夏令营はそうした手だての有効な一つのありかたとして注目されるのである。今後はさらにその教育効果についての科学的な検証を踏まえて一層の充実を図ること、そしてすべての子どもたちが何からの形で夏令营のような体験活動に参加できるようにする施策を進めることが、重要な課題となるだろう。

(2) 軍隊における体験活動

中国では、夏令营が主として小学校や中学校の子どもたちを対象とする体験活動だとすれば、高等学校や大学の若者たちにとっては軍隊の体験が有力な体験教育の方法として注目さ

れている。

独生子女をめぐる問題は、解放軍に入隊する若い兵士についても例外ではない。何磊（ハ・ライ）氏と苏丹（ソ・タン）氏が2001年に発表した論文「中国の小皇帝は戦うことができるのか⁽²³⁾」によると、ある解放軍の部隊で調査したところ、2001年に入隊した新兵 900人のうち半分近くを占める独生子女には、入隊当初、いくつか際立った特徴が見られたという。すなわち彼らは、苦勞することが嫌い、部隊の規律に耐えられない、依存心が強い、自己中心的で他人のために何かしようとする精神が乏しい、情緒が不安定、ひとと協力するのが苦手、などの特徴を備えていた。しかし、軍隊での半年以上にわたる教育と訓練をとおして、進んでひとのためにしようとする態度や、規律を積極的に守ろうとする態度、協力的な態度、自立性、情緒などの面で目にみえる変化があったという。しかも、独生子女としての欠点が矯正されるだけでなく、同時に、彼らがもともと持っていた長所も発揮されるようになったという。

この部隊の指導教官は次のように述べている。「“小皇帝”自体は怖くはない。むしろ学歴が高いとか新しい事物に対する適応性が高いなど、彼らがもともと持っている長所は、近代的な軍隊に必要なものであって、大事なのは部隊がどういうふうには彼らを教育し訓練するかである。その点で中国軍隊の独生子女に対する教育訓練はきわめて効果的なものである。今のところはまだ彼らの本当の戦闘力が見えにくいかもしれないが、もしあなたが独生子女兵士の父母であるなら、今までわがままだった“小皇帝”が4年間の徴兵で大きく様変わりし、大人びてきたとか、たくましくなってきたなどの著しい成長をきくと感じるにちがいない⁽²⁴⁾」と。

軍隊はもちろん戦争のための機関であって、教育訓練のための機関ではない。しかし、上記のような事実から、独生子女の素質を全面的に高める、すなわち独生子女が抱えている問題を解決するだけでなく、もともと独生子女が持っている有能さを発揮させるのに、軍隊での訓練が効果的なものと考えられるようになってきているのである。

中国の大学では《中華人民共和国兵役法》第43条にしたがって軍事訓練（中国では「軍訓」と言う）が行われ、大学生はすべて、男女の区別なく、在学期間中に必ず基本的軍事訓練を受けなければならないことになっている。また同法第44条によって、大学は軍事訓練機関を設け、軍事訓練の教官を配置して、大学生の軍事訓練を指導するように義務づけられている。軍事訓練の時期や期間は大学が独自に計画することになっているが、1ヶ月にわたって行う大学が多い。軍事訓練の教官はすべて部隊専属の軍人である。軍事訓練のプログラムは、大学の軍事訓練機関と教官が共同で作成する。軍事訓練の主な内容は、軍人生活の理解（講義）、実技訓練（射撃訓練、夜間徒歩訓練、緊急起床訓練、等々）などである。

大学での軍事訓練は、若者の自立性、忍耐力、思いやりや挑戦する気力などを育成するとともに、先代の人々の血で贖われたかけがえのない平和を大事にしながら、祖国の発展のために大学生生活を有意義に過ごさなくてはという強い責任感もしっかり身につけさせるのに寄与すると考えられている。王玉祥（ワン・ユシャン）によると、このような効果が期待される大学生の軍事訓練の重視は、「四有（理想・道徳・知識・規律ある）」人材を培う戦略の一つとして位置づけられている⁽²⁵⁾。

軍事訓練は大学だけでなく、《中華人民共和国兵役法》第45条⁽²⁶⁾にしたがって、一部の中学校や高等学校でも行われている。中学、高校での軍事訓練は、大学の軍事訓練とは違って、

夏休みや冬休みに大体1週間ぐらい行われるのが一般である。かつては大部分の家庭が貧しい生活をしており、子どもは生活のつらさ、苦しさを親とともに体験しながら、たくましく育っていた。それに対して、現代の子どもは幼いころから、もののありがたさを感じたり苦労したりする体験を知らずに育てられているため、ひ弱なところがあり、独生子女はそうした弱さを抱えた現代の子どもの典型ともいうべき存在である。軍事訓練は、そうした子どもが心身とも健全に成長するのを促す上で有効であると考えられる。

若いうちにいろいろな体験をすることが創造性のある人間を育てる最も有効な道であることは、中国でもすでに古くから指摘され注目されてきたことである。独生子女問題を中心に、若い世代に現れているさまざまな問題を克服するだけでなく、さらには新しい時代における中国の発展を担う人材を育成するためにも、いま改めて体験教育の意義が注目されなければならない。そのなかでも、先に取り上げた夏令营をはじめとする野外活動体験とともに、規律と使命感が重視される軍隊での生活と訓練を若いうちに経験させることの教育的意義について、さらに掘り下げた研究を行うことがますます重大な課題となるであろう。

5 まとめ

本稿では、中国における独生子女（一人っ子）問題を取り上げ、それが現代中国の社会と教育にどのような問題を投げかけているのかについて考察した。そして、その問題の解決のためには「素質教育」の発展がカギであることを指摘するとともに、その具体的な方法として体験教育に注目し、とくに「夏令营」と「軍隊での体験」について具体的に考察した。

日本では早くから少子化が進行し、それに伴う教育上の問題がさまざまに指摘されてきている。中教審が「少子化と教育について」と題する報告書を2000年に発表したのも、少子化の急速な進行に伴う問題への危機意識を反映したものであろう。中教審報告はそうした危機意識に立って、少子化が引き起こしている諸問題の解決策としてさまざまな具体的施策を提言している。

中国でも少子化が急速に進展している点では日本と同様であるが、日本での少子化はさまざまな社会的要因を背景に一人の女性が産む子ども数が減ってきたことが最大の要因である。それに対して中国では、人口抑制策の一環として「独生子女（一人っ子）」政策が行われ、出生数を人為的に削減する措置がとられたのが最大の要因である。この点で中国と日本とは問題発生の事情が異なっており、その限りでは中教審報告の具体的提言も、中国における少子化問題の解決にはそのままでは参考にはできないだろう。

しかし、中国における少子化の進行には、とくに1990年代以後の中国経済の急速な進展と社会の変化を背景として、「独生子女」政策だけでは説明できない新しい様相が現れている。そこには日本における少子化と同様の問題も指摘され、その限りでは、中教審報告の具体的提言も参考になるといえるかもしれない。

とはいえ、中国と日本とは、少子化が類似の現象であるとしても、もともと教育の発展段階や社会政策の一環としての教育の位置づけが異なっており、したがって中国における少子化対策についても単純に日本での施策や提言をそのまま受け入れるわけにはいかない。とくに、すでに高度に経済が発展した日本では、少子化の進行は有能な人材の確保を妨げる問題としてとらえられる側面がある。それに対して、経済がまだこれから発展していくことを

期待されている中国では、少子化の急速な進行と、それに伴う若い世代の人的資質の劣化は、中国社会の今後の発展を担う人材の質の低下という重大な結果をもたらすことが懸念される深刻な問題なのである。しかし同時に、人口が多く、また人口増加の勢いが著しかった中国では、すべての子どもや青年たちに等しく教育の機会を提供するのはきわめて困難であり、「独生子女」政策の進展によって子ども数が減少した結果、できるだけ多くの若者たちにできるだけ質の高い教育の機会を提供する可能性がようやく生まれたともいえる。もちろん、すでにさまざまに指摘され、また本稿でも取り上げたように、「独生子女」政策のもとで生み出されてきた「一人っ子家庭」は、子どもの健全な発達を歪めるさまざまな問題を生み出していることも事実である。しかし同時に、「独生子女」政策は上記のようなメリットをもたらしてもいることに、改めて注目することが必要である。そして、これからの課題とすべきは、少子化が引き起こした問題を克服しつつ、一人っ子のメリットを引き出す教育をどう実現するかということである。このような観点から、本稿では「素質教育」に注目し、その具体的な方法としての体験教育について考察した。そして、その考察によって到達したのが、夏令営をはじめとする野外体験活動と軍隊における体験であった。

しかし、これらの活動が素質教育の発展にとってどのような有効性をもっているのかについては、中国でもまだ研究は少なく、本稿でも十分には掘り下げられなかった。今後はこれらの体験教育が素質教育にとってどのような点で有効なのかについて、もっと立ち入った研究が必要となろう。そして、そうした体験活動が素質教育にとって真に有効であることが明らかにされるなら、次にはそうした体験教育をすべての子どもたちに保障する施策をどう進めていくかが具体的な課題となる。大学生の軍隊での訓練はすでに法律で義務づけられているので、すべての学生がその訓練を体験する機会を保障されているといえる。しかしその中身についてはなお改善の余地があり、そうしたことを含めてさらに研究を積み重ねることが求められている。他方、主に小・中学生にとって貴重な体験活動の機会である夏令営をはじめとする野外活動は、まだ学校教育の一環として組み込まれてはいず、個人の自由参加に委ねられている。したがって、個人の負担による費用もかかるこうした体験活動に参加できる子どもたちは、ごく限られているのが現状である。これについても、夏令営が子どもたちの素質教育にとってどのような意義をもっているのかについての詳細な研究を進め、その成果にしたがって、もっと組織的に取り組むことが必要となろう。

いずれにせよ、子どもたちの素質を全面的に発達させる体験教育の意義を一層明らかにするとともに、その機会をできるだけ多くの子どもたちに保障すること——それが、少子化に伴う問題を解決するばかりでなく、中国社会が求める新しいタイプの人材を育成する道に連なるにちがいないと考えるのである。

注

- (1) 『中国人口情報研究センター報告』1995年版。
- (2) 中央教育審議会「少子化と教育について（報告）」2000年。
- (3) 同上。
- (4) 李学斌「拓展视野、走向深入——近期我国独生子女研究的 视状和分析（近年我が国における独生子女に関する研究および分析）」『当代青年研究誌』、1998年。

- (5) 同上。
- (6) 孫云暁『培养独生子女的健康人格（独生子女の健全な人格を育成する）』天津教育出版社、1998年。
- (7) 同上、3ページ。
- (8) 同上、245～262ページ。
- (9) 同上、265～282ページ。
- (10) 李艷（リ・エン）『让孩子互相学习——独生子女教育成功之路（子どもに相互学習させよう—独生子女教育成功の道）』湖南少年儿童出版社、1999年。
- (11) 社会主義改造第一次五ヵ年計画の大成功を背景に、1958年5月、共産党の第8回全国人民代表大会で社会主義建設のための本格的総路線が定められた。そして、短期間のうちに工業生産高の点でイギリスに追いつき追いつくことが目標に掲げられ、全党および全国民にアピールされた。同年8月、中国共産党中央政治部は北戴河で拡大会議を開き、1958年度の鉄鋼生産量を1957年度（535万トン）の倍、1070万トンに増大させるという目標を掲げた。ここからいわゆる“大躍進”運動が全国各地に広がっていくことになる。“大躍進”運動は、工業・農業だけではなく、交通・郵便・教育・文化・衛生環境などの分野にまで及んだ。しかし、高すぎる目標や指示系統の混乱などにより、さまざまな問題や弊害も次第に明らかになってきた。1960年の冬、中国共産党と毛沢東主席は“大躍進”における左翼的な過ちを修正する対策を行ったが、しかし結果的にこの運動は経済成長の停滞を招き、社会主義建設の事業に重大な否定的影響を及ぼしたものとして、今日では批判されている。
- (12) 中国科学院国情分析研究小组『生存と発展』科学出版社、1989年。なお、院長の指摘の初出は、『生存と発展』1977年。
- (13) 孫云暁「家务劳动——人生必修课（家事は人生の必修科目である）」、<http://www.sunyunxia.net.cn>、2002年。
- (14) 孫云暁、前掲書、57ページ。
- (15) 張仁善「現代青少年犯罪の現象、要因及び防止対策について」『中国青年報』2001年。
- (16) 辞海編集委員会編『辞海』1999年普及本、上海辞書出版社、1999年。
- (17) 『教育大辞典』（修訂本）上海教育出版社、1998年。
- (18) 『中国教育年鑑』各年度版。
- (19) 孫云暁、前掲書。
- (20) 以上、一連の各種調査データは、孫云暁、前掲書より。
- (21) 傅維利「体験教育に関するいくつかの思考」、<http://wzedunet.yeah.net>、2002年。
- (22) 朱瑾（ジュ・ジン）、江南都市報、2002年7月10日。
- (23) 何磊、苏丹「中国の小皇帝は戦うことができるのか」『中国青年報』2001年。
- (24) 同上、32ページ
- (25) 王玉祥『大学軍事訓練教材』大連理工大学出版社、2001年。
- (26) 《中華人民共和國兵役法》第8章第45条に、「重点中学校及び重点中学校に相当する学校には、軍事訓練の教員を配置し、青少年に対して軍事訓練を行わなければならない」と定めている。

(2003年4月30日受理)